

ダメットの顕示の要求に対するマクダウエルの批判

山田 竹志 (Takeshi Yamada)

早稲田大学人間科学部非常勤講師

マイケル・ダメットは、実在論を拒否するための「顕示論証」と呼ばれる論証を 1970 年代前半に提起したことで知られている。ジョン・マクダウエルは主に 1970 年代後半から 1980 年代にかけて出版された一連の論文で、このダメットの論証に対し様々な角度からの反論を与えた。この反論はダメットの論証をめぐるその後の議論に大きな影響を及ぼしてきたし、マクダウエル自身の思想を理解する上でもこの反論の理解は重要だと思われる。本発表では、マクダウエルの反論の中でも特に「顕示の要求 manifestation requirement」（あるいはその背後の「徹底性の要求」）に対する批判を取り上げ、応答する。

顕示の要求（ないし顕示テーゼ）とは、「表現の意味の把握は、その表現の使用によって余すところなく顕示されねばならない」という主張である。マクダウエルはこれを動機づける反心理主義的な意味観に共感しつつ、意味の把握の顕示とみなされる使用をどう特徴づけるべきかについてダメットと意見を異にする。マクダウエルによれば、（例えば）「身軽である」という表現の理解は、あるものについて、それが身軽であるという思想を表現するために「身軽である」という表現を使う（典型的には、ある人が身軽であると主張するために「その人は身軽だ」と言う）ことにより顕示される。そして、それが身軽であるという思想を表現するために表現を使うとはいかなることかについて、還元的な説明は不可能であると主張され、この還元不可能性を示すために、ウィトゲンシュタインの規則遵守論が援用される。ダメットはここで不可能だとされた、還元的な説明を要求しているとして批判されている。

本発表ではこれへの応答として、まず、ダメットにおける意味の把握の顕示とは、正常な条件の下で状況に適切に反応して表現を用いることに他ならないと指摘する。その上で、マクダウエルが規則遵守論を用いて指摘したことは、結局のところ、この「正常な条件」が成立しているかどうかは必ずしも有限的な証拠からは確かめられないということに過ぎず、このように考えたとき、ダメットの特徴づけるような顕示を求めるのは特に不合理ではないと論じる。

文献

McDowell, John. 1981/1998. "Anti-Realism and the Epistemology of Understanding". Reprinted in his 1998, pp.314–43.

———. 1984. "Wittgenstein on Following a Rule". *Synthese* 58(3): 325–63.

———. 1987/1998. "In Defence of Modesty". Reprinted in his 1998, pp.87–107.

———. 1997/1998. "Another Plea for Modesty". Reprinted in his 1998, pp.108–31.

———. 1998. *Meaning, Knowledge, and Reality*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

山田竹志. 2022. 「顕示の要求の擁護：アンスコムの実践的知識論を応用して」. 『科学基礎論研究』 49(2): 111–30.